

## 雑報

雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 5 2
ページ	1 0 3 - 1 2 3
発行年	1913-11-05
その他の言語のタイトル	雑報
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6304">http://hdl.handle.net/2298/6304</a>

# 第二十二回卒業生人名(○京都△九州)

## 第一部甲類

英語法律科、政治科、經濟科

### 商業科、

七十名

杉山正雄 岡村連 中村重喜  
宮崎直樹 兒玉正 園田久吾  
津田廉卿 砥綿保 渡邊喬  
大塚勝治 森純造 吉原政義  
寶珠山芳樹 奧村敬五郎 大江退三  
椎名一郎 中井一夫 坂田貞雄  
赤瀬千代喜 川村相造 周龍光  
大津留耕吾 神垣秀六 柳世綱  
森重敏 和田秀夫 島村秀雄  
志賀志那人 生駒良介 金子彌太郎  
○大島節 藤岡萬五郎 本田弘行  
村山隆 下田巧 小川金治郎  
柴田龍麿 芳賀重一 猪鹿倉文夫  
篠原省三郎 石川稻城 渡邊七五三  
○青木敬輔 大野初熊 大坪一二  
○草場聰 中村茂 中島季彦  
○鐘ヶ江富次 占部周策 青山直一

○大野靜麿 義岡五郎 山田信一  
橫尾謙四郎 田中盛枝 國井政一  
小西彌壽太 中摩直一 牧野尙武  
○大野熊雄 中野直一 保田哲夫

## 第一部乙

英語文科

十九名

(○印八洲君を除き他は法科)

増田寅雄 陶山喜六 瀧口智  
松尾長造 高松清 八洲吳龍  
栗林卯平 岩永隣一 津村謙治  
○小林彌太郎 縣谷憲成 平島義顯  
○岡田德藏 八幡屋春太郎 奥野正一  
○加藤邦三 安居院經市 白井潔  
○松永伊三郎

## 第一部

獨語法律科、政治科、

二十三名

林靖夫 吉川輝次 星子廣記  
越智通明 河部末人 安河内升  
飯田猛 百崎富弘 和田正基  
大石千隆 古谷實 島田義幸  
○岡城礎吉 西緯 米田米次郎

○平野 登  
○長瀬 信二  
○白石 三千夫  
○村上 義臣  
○高橋 守  
○小山 金剛麿  
○山田 一郎  
○長濱 俊秀

第二部甲 工科 七十九名

川邊 謙司  
野口 篤雄  
△三宅 與助  
△村上 義夫  
△喜多島 藤三郎  
△田中 熊彦  
△白木 原民治  
△後藤 季聰  
兵頭 熊一  
○穴澤 藤作  
若山 直次郎  
○栗津 恕  
△伊地知 熊  
△大岩 復一郎  
△向定 吉  
高濱 保吉  
尾藤 憲祐  
△桑原 寬砥  
○久高 將吉  
○坂本 俊三  
佐藤 島敏介  
佐藤 壯

○富田 惠四郎  
○胡 飛  
後藤 太郎  
宮崎 彦次  
白山 彌太郎  
△信原 龍夫  
鮑 羽儀  
△山內 敬男  
河喜多能直  
○赤司 貫一  
○稅所 篤雄  
△古賀 健太  
○黑岩 隆  
○野村 眞道  
○桶田 集五郎  
○須田 大助  
○門司 英吾  
○川口 達郎  
○高橋 文太郎  
○西岡 政敏  
○小柳 勝次郎  
○赤木 吉三郎

第二部乙 理科 三名

第二部乙 農科 二十九名

永淵 正敏  
黑木 侃  
吉田 安喜雄  
辻 正道  
木下 勇男  
眞鍋 嘉敦  
竹末 要人  
田中 清彦  
森崎 文喜  
窪田 清市  
川內 義左衛門  
安香 愛二  
立川 義夫  
野中 嗣雄  
山本 寅雄  
鎌田 正治  
牛島 寛  
前田 惟智  
笠勝 士  
高橋 謙吉郎  
西岡 米太郎  
長野 祐明  
納富 重雄  
早川 淡二  
工藤 來  
古賀 武徳  
橋村 博  
有村 實一  
橋本 驥一  
内藤 親義  
坂田 靜夫  
山瀬 靖  
本田 武彦

第二部乙 醫科ノ内藥學科 一名

### 第三部

### 醫科

四十三名

阿部勝馬	高島勘一郎	栗原吉彌
渡邊一耶	岡本紘	藤井清文
井上澄	影浦尙視	原田永之助
知念朝太郎	園田甫	△古川強二
△深江一	○山下林平	△大野良藏
○高折茂	○山口二三四	○高木四郎
○釘宮覺	○加來卓郎	○北村直躬
△宮崎明夫	○福田親人	○太田達策
△辻誠助	△吉川義之	○篠田重憲
△荒牧悟	△横山鐵夫	△三澤浩
△新名常造	△佐藤桂一郎	△小笹猗夫
△尾形辰雄	△伊東昇	△野守繁人
△節丸力	△和田常雄	△吳萃蘭
△八尾實男	△小山逸見	△吉永蘭
△小野三七雄		

## 創立廿三週年記念式

大正二年十月十日——

記念式は例年の如く濟美館裡に行はれたり。午前九時半職員生徒一同式場に入り、續いて校長の先導により來賓諸名士の着席せらるゝや、茲に嚴肅なる

式は始まり。松浦校長の祝辭を初とし、教員總代山形教授、生徒總代山本總務の祝辭あり。次に生徒一同開校記念歌を合唱し、詩歌文章朗詠の事行はる。各所よりの祝電は松井總務披露したり。柔劍道の型及試合これに續く。かくて十一時を過ぎて式は終りぬ。コスモスの花紅白に咲きみだれたり。かゞやかなる陽は丹堂碧禾を照らしけふの佳き日を祝ふが如し

## 記念陸上運動會

午後一時より運動會が始つた。空は晴天。時候は丁度よい時。紳士淑女を始め普通の男女小供が武夫原の三分の一位を埋めた。盛裝せる役人と女が大いに異彩を放つた。けだし五高は年に一度この盛觀を呈する。その他の日は剛毅未訥だ。運動の模様は左の如し。

第一回	二二〇ヤード競争	一、宮城	二、山崎	三、田中
第二回	二二〇ヤード	一、古地	二、古川	三、太田
第三回	二二〇ヤード	一、萩原	二、古川	三、牧野
第四回	打灯	一、羽田	二、小林	三、小豆澤
第五回	川渡	一、村尾	二、原田	三、古池
第六回	三人四脚	一、高橋	二、永野	三、竹田
		四、二鶴	五、富田	六、大場

第七回	三人四脚	一近藤、菰原、原、二松本、徳住、中島
第八回	柿吊(逆立)	一、前田、二、荒川、三、荒牧
第九回	サックレース	一、村尾、二、栗屋、三、中山
第十回	サックレース	一、原田、二、長尾、三、萩原
第十一回	四四〇ヤード	一、仁保、二、石田、三、橋本
第十二回	四四〇ヤード	一、宮城、二、水江、三、有田
第十三回	運搬	一、進藤、二、古池、三、増永
第十四回	運搬	一、桧、二、原田、三、陶山
第十五回	跛	一、小林、二、田邊丈、三、田邊敏
第十六回	檀廻	一、森、二、山本
第十七回	檀廻	一、古池、二、有田、三、原
第十八回	檀廻	一、犬塚、二、古川、三、大津
第十九回	パン吊	一、牧野、二、渡邊、三、岡田
第二十回	逆立	一、荒木、二、進藤、三、今川
第二一回	集團	一、三戸、二、指原、三、久坂
第二二回	虛無僧	四、根岸、五、橋本
第二三回	ダルマレース	一、久坂、二、鶴本、三、田中
第二四回	ダルマレース	一、有田、二、矢田、三、大高
第二五回	ビスケットレース	一、栗屋、二、黒井、三、士岐
第二六回	龍南會各部レーク	一、森田、二、工藤、三、高山
第二七回	障害物	一、柔道部、二、野球部
第二八回	障害物	一、牧野、二、山田、三、福島
第二九回	連續一年	一、原田、二、打尾、三、古閑 一、二部有田、渡邊、園尾

第三〇回	連續	二年三部宮本、古川、相場
第三一回	連續	三年一部太田、牧野、橋本
第三二回	小學校	一、秋山(黒髪)、二、林田(鮑託) 三、松永(黒髪)、四、林上(全上) 五、硯臺(山室)、六、東(黒髪)
第三三回	小使炊夫	一、緒方、二、木村、三、藤本 四、石坂、五、徳山
第三四回	職員(提灯)	一、土野、二、齊藤、三、後藤 四、宮野、五、大塚、六、河島 七、小豆澤、八、牧山、九、玉置 十、宇佐美、十一、正木、十二、江部 一三、ワリー
第三五回	委員(提灯)	一、川久保、二、中村、三、城戸 四、湯川、五、萩原、六、太田 七、永松、八、瀧口、九、近藤 十、古賀、十二、久藤、十二、高安 十三、駒井、十四、山下、十五、原
第三六回	中學校選手 (二分二六秒)	一、川島(暗申)
第三七回	二、外山(鎮西) 三、甲斐(鎮西) 四、清藤(濟々)	二、外山(鎮西) 三、甲斐(鎮西) 四、清藤(濟々)
第三八回	専門學校選手 (二分二一秒)	一、堀田(醫專) 二、木脇(高工) 三、鹿子島(藥專)
第三九回	八八〇ヤード (二分三〇秒)	二、高安 三、弘本

第三九回 來賓

一、藤野(高工教授) 二、御厨(熊本郵便局長)

三、大野(法學士縣屬) 四、坂本 五、永山 六、原口

七、ホーン 八、小原

第四〇回 各部撰手競争

撰手ハ 一部(綠) 谷川 國造、大庭 岩夫、内藤 民次

二部(白) 淺倉銀四郎、土岐増太郎、井上 孫入

三部(赤) 犬塚 赫夫、七田 龍夫、三田 泰三

黄昏になつても始まらぬ。見物は氣がもめる、もう歸らうとこぼすものも居る。選手は抽籤で順に列に即く。第一回で白―大分の距離―綠、赤、白、第二回で赤、白、綠、第三回で赤、赤―白、綠、綠、第四回は決勝白―赤―この間大分の距離―白赤綠並び来る

優勝は二部淺倉、二分十九秒、二着は三部三田三着 一部谷川終つた時日全く暮れた。數間距てて人の顔が見えない。觀客散じて秋風肌に冷たく紙片散乱して目出たき運動會がすんだ

クロツスカンツリイレエス

(十月十一日)

紺青高き秋空に蘇山の烟紫に横つて武夫原に蘭香充

つる時龍南の猛士、奮起せよ、それ巨鵬のごとく蛟龍の如く怒り狂へといふ大広告が本館の横つ腹に貼りつけられた、武夫原を出發して、本妙寺、水前寺、記念碑、師範校、明午橋の各關門を任意に通過して武夫原へ歸つて來るので一時間半以内に歸着した者にはメダルを與へるし一等二等は銀時計三等は舶來毛布を與へ福景品積んで山のごとしといふ健兒大に雄躍して締切日まで無慮百五十名、少々調子が新聞屋臭くなつて來たが盛なものだといふだけは事實だ、

競走加入者にユニフォームを着せる事になつたので勢ひ淘汰しなければならぬやうになつた、七日午後三時渡鹿練兵場で豫撰競走を舉行した、それだけでも立派な一運動會の壯觀であつた、

申込者を二組に別けて曠野を二週せしむることになつた、江部教授この日顔色益々輝いて龍南彌々盛なりといった風の感慨があつたらしい第一回組一着者二部一年荒木君、第二回組一着者二部一年有田君であつた、各部撰手は豫撰競走に加らないで本レースに加る特權を有することになつた、

意氣衝天の第二日午後一時武夫原は番號つきの運動  
シャツをつけた五十名に壓せられた、烽烟が轟いた  
樂隊が鳴る五十のマアクが飛んで行く、先づ近路を  
とつて師範校へ赴いたものが殆ど凡て二三人が明  
午橋から水前寺に向つた、

師範校の正門では殆ど一團になつてゐた、先頭が要  
した時間は九分位であつたらう、赤いバンドを引つ  
さらへて逃げるやうに走つて行く、茶を沸して置い  
たり氷砂糖を用意して置いたりしたが振りむいて呉  
れる走者もなかつた、

本妙寺を経て記念碑に來た時は四十五號が先頭で二  
番と二三町も離れてゐた、群衆が道路を狭めて巡查  
が聲を囁らしてゐる、應援隊がそろそろ活動を初め  
た、最早團隊競走のやうでなくて各個の速さの競走  
となつた、四十五號がよく走る、いくらでも走つて  
行く、

記念碑から水前寺までが撰手にとつて最も苦しい  
長丁場だ、應援が續かなくなる、丁度遊山に來てゐ  
た人々が寄り集つて來る、遠くから眞直な道を走つ  
て來るのが見ゆる、拍手が起る、依然として四十五

號が他を抜いてゐる、直ぐに引かへず、明午橋でも  
四十五號が第一等だ、一分以上早い、白いシャツの一  
團が現れて應援する、もう近いぞ、走れ走れとわめく  
逆廻りの方では武夫原出發後五十二三分で谷川君が  
ひよつこり師範校前に現れたので關守が驚いた、十  
分ばかり経つても一人來たきりであつた、落伍者が  
二人あるらしいと判つた、

四十五號が武夫原に殺倒した、武夫原も歡迎者で埋  
つてゐる、二分近く遅れて逆廻りの谷川君が第二着  
だつた

一、三田	泰三君(三部)	一時一分廿秒
二、谷川	國造君(一部)	一時三分五秒
三、内藤	民治君	一時四分五秒
四、高安	三次君	一時四分廿秒
五、田邊	丈夫君	一時四分卅秒
六、淺倉	銀四郎君	一時五分
七、綿	貫君	一時六分五秒
八、清	住君	一時六分六秒
九、宮	城君	一時六分五十秒
十、相	塲君	一時七分

十一、荒木君      十二、犬塚君      十三、栗田君  
十四、宮田君      十五、工藤君

## 紀念祭習學寮作物批評

雜誌部委員

○猫のなき聲(五高不思議の一)——南寮一室  
潜越ながら、僕が一番槍を試みてゆく。讀者のために少しづつ、説明も添へて置かう。——本物の猫をかごに籠め入れて天井に吊したのは慘酷だと觀衆の一人は言つてゐたが、鳥渡奇抜な思ひ付だ。併し籠の中の猫こそ御迷惑なもの、夏目さんが居たら又何とか書いたであらう。(雅)

夏目さんの猫が五高の猫と因縁があつたと假定すれば籠が上野の動物園を思はしめ、深山に入つて虎の鳴聲を聴きに行く氣持を得さすかも知れないとはちと附會かな。(どん)

哀れなる者よ、波が名は猫なり。で動物虐待の標本とふより外に取立て、騒ぎ出す必要もないと思ふ。

(三郎)

○熱海の海岸(金色夜叉)——南寮二室  
ダイヤモンドに目がくれたた宮は實に滑稽な顔をしてゐた。併し一月十七日の月はよく照つたやうだ。

(雅)

習學寮の飾物は何か龍南生活者に意義がなければ無意味だ。(どん)

帽子の筋は白三つの様だつたが、貫一さんは五高に轉校したのか知らん。(三郎)

せめて二人の顔を戀し戀さるゝに足る程に作つてあつたならばと小言が云ひたい處だがまづ彼の位にまとめたのは上出来々々々。た宮の衣裳は疑つた物だ、室員の棘腕を賞す。(高)

習學寮の飾物に金色夜叉が出た、剛毅木訥に違反する事烈しい。(鳥)

○浦島太郎——南寮三室

寧ろ校外廣告にベストを盡してゐると思はれる。龜の足に靴をはかせたのは氣がきいた。背景は善いと思ふ。(雅)

室内裝飾の意義をはきちがへた一例だ(どん)



靴も中々傑作だったが、顔の筈もい、思付きだと感に入つてた向きもあつた。自己吹聴する連中には、わて中味がないものだが相應に努力の跡も見えて嬉しい。(三郎)

背景を蚊帳で隠したのは氣に入つた。(高)  
批評を書く時既に早やこの飾物の光景を忘れて居たから駄目だ。(鳥)

○人生觀——南寮四室

蚊帳で張つた大達磨に蠶の眼鼻がついてゐた。餘り感心もしなかつた。(雅)

題目が洒落れ過ぎては内容が壓倒される。(と)  
あれで人生觀など、納まつてる内が花だ。(三郎)  
も少し考があり相なものだに。(高)

一人位は賞むるのもよからう。上出来だ。(鳥)

○南五座——南寧五室

本目藝題温故知新。赤い心を墨で書いてる兒島高德の人形はまづい。けれど作意はいゝと思つた。(雅)  
考へて見た後で馬鹿らしかつたと思つた。(とん)  
題は見ての如き歸りで、つまらなかつたら壬生守だ相な。(三郎)

兒島高德が瑞邦館で忠君愛國演説をやつたら吾人は感奮興起するけれど。(鳥)

○私立龍南動物園——南寮六室

ばせを葉で熱帶地方をあらはさうとした所はよかつた。殊に大蛇、大墓は妙と思ふ。(雅)  
ちつとも感興を惹かない、考へさせる飾物と考へた事を示す飾物と二種類に別けると後者は分が悪るい(とん)

誰の眼にも美は美と見ゐると見ゐる、僕も蛇と墓とに團扇を上げて置く。上作の部。(三郎)

動物園の臭氣までさせて呉れたのは御叮嚀過ぎる、それとも掃除が行届かない爲めに寮雨の餘臭でも残つて居たのかしら。(高)  
汚くていけない。(鳥)

○Motor Boat——南寮七室

自治のハンドルは時節柄結構だが背景の無いのがもごかしかつた。(雅)  
少々兒供染みたやうだ。(とん)  
「拔天號」なら意味も通するばつてん、「雲雀號」とは一向に解せぬ。水上は勿論空中までも自由自在に天

翔り雲翔らん爲めとても解釋すべきか。さりとて桐慾な。(三郎)

「自治のハンドル」と云ふ標題が良かった丈けそれだけ作物が飽氣なかつた。(高)

○幽靈屋敷——南寮八室

あ、を隠すつもりか、今年の作物は一体に暗いのが多い。これなどもそれだ。只闇黒で兒女には恐いといふばかりである。但しこれだけの木や竹を伐つて來たのは御苦勞さま。(雅)

陰鬱だな、だが神秘の匂ひが少いな。(どん)

晩に寢床を敷いて見給へ、なぞと脅文句を使ふべく、あまりにあつけない。(三郎)

何しろ暗いので何が何だか分りやしない。(高)

僕にも實に明瞭に見え無い近眼だから。(鳥)

○二見浦——南寮九室

巖は悪くもなかつたけれど一体に月並な作だ。(雅)

(どん)

日出前の二見を崇拜する者は古來多くあつた。

(三郎)

月並でも何でもね。善い出來だ。作者は益奮勵自重すべし。(鳥)

何のことだい。(高)

○武夫原——南寮十室

眼界の濶い善い作だが、それより外に何といふ感じも起させないのは惜しいものだ。(雅)

草だけは感心した、も少し大規模に設計したら宜かつたらうに。(三郎)

集會場と娯樂室にも少し念を入れたら何うだつたらう。(高)

序に娯樂室で喰はして呉れるだらう。口汚い奴にも困るよ、ふふ。(と)

○休憩室——南寮十一室

平凡だ。(雅)

作り物は面倒臭いからとのズルイ了見からであつたかも知れぬが自腹切らせたのは氣の毒である。

(三郎)

乾干びた菓子を喰はせて置いて金を懸けるなら斯う云ふ處に懸けるものだなぞ、納まり返つて居る處が可愛らしかつた。(高)

物質の提供があれば何よりだと思ひ、いんな思つてゐる癖に(と)

○人生の不可思議——南寮十二室

念は入れたらしかつたがあまり善いとも思はなかつた。(雅)

よく不思議不思議といつて騒ぎたがる寄宿舎だグリエーションに聞かしたら何と云ふだらう。(三郎)  
折角骨折つても一貫した思想が顯はれない作はだめた。(高)

○熊本百景其一、五高——南寮十三室

五高の本館はも一つの作(北の一)の方がよく出来てゐる。(雅)

御氣の毒だが兎に角御同感だといつて置かう。

(三郎)

○月夜の雨——南寮十四室

瀧だけは餘程いゝけれど外に何の取りどころも無かつた。(雅)

瀧雨と書いて何と讀むのか知らんて。(三郎)

瀧としては慥に第一等。(高)

瀧、幽霊等は毎年出る作者は須らくもつと嶄新奇拔

るなものを工夫すべし。(鳥)  
弱るな、さういつてしまつては。(と)

○二見浦——南寮十五室

今年の作物には三つも二見浦があるので頭腦の一樣なのに先づ驚いた。これもあまり見る感がしなかつた。(雅)

偶然の暗合なのか、前の九室のと構造までがそっくりだつたのには妙な氣がした。前同斷別に之といつて評する價值もない。「五高明神」なんかつて今時分「黎明」の象徴など、騒ぐ柄でもあるまい。(三郎)  
地口行燈ぢやあるまいし「五高(御光)神州に漲る」は俗惡だ。(高)

さう罵倒しては可けぬ。随分苦心の作かもしれぬ。

(鳥)

(鳥)を平和會議座長に推す。(と)

○幽?——南寮十六室

つまらないと思つた。(雅)

佛の顔も三度たどさ。場所の惡かつたのがた氣毒、どうして斯う幽霊斗り作りたがるのだらう。(三郎)  
しかも其れが皆北側の室斗りだと云ふ處に何だか意

味があり想だ。(高)

然り然り。北側の室は光線學上歡迎すべからざる所だ。北傍に居る人はメランコリーにならぬやう注意すべし。(鳥)

○璧勝五郎——南寮十七室

釣合のこれぬ所が拙いんだ。瀧もあるした堂もあるし、車には紋も入れてあるんだけれど。(雅)

——を車にのせて、ひくや初花箱根山、當年の空氣を想ひ出さしめるには可成十分であつた。(三郎)  
何となく落付きが無い、氣の毒だか餘り感心したとも思はなかつた。(高)

勝五郎君と悲しむなかれ、君と初花君と同乗して新婚旅行するために自動車發明あり。(とん)

○嵐山の入口——南寮十八室

僕は少くとも二等級にはしたかつた。樹木には用ゝ甲斐があり、雪は美しかつた。渡月橋と椅子四五脚で巧に出來た。灰色の空の下に自然のつよく出た無駄のない作だ。(雅)

敵素に評判がよかつた、二三人からいゝねと聞いたやうだ光琳の話も出てゐた。(いん)

努力も實價も當月の屈指たつたらう。僕の眼球には白雪と長明燈とが最も鮮かに映寫された。三等に選ばれた「ボート」なごよりはより以上に話せると思ふのだが。僕も非常に良かつたと誇めるのに躊躇しない。(三郎)

だが窓から覗かせて爲めに餘程損をしただらうと思ふ。(高)

さう云ふ名作なら熱心に凝視すればよかつた。(鳥)

○五高の摸型——北寮一室

二部的だ。忠實に作つた所はいゝ。寮の穢いペンキ塗もよく出てゐる。が百尺竿頭一步を進めて背景に龍田山が描かれて欲しかつた。背景も何もなくては感じが良い。(雅)

軍艦の摸型は非常に高價なものださうだその癖ちつとも面白くない。(とん)

吾輩も白三筋時代には學校摸型の處女作を試みて大向ふをやんやと唸らせたつけ、半白の工學博士が自慢話をまのあたり聞くやうだ。(三郎)

苦心は認めます、だが要するに平凡だ。(高)

例へ平凡でも善い物なら惡口してはいけぬ。頭の整

頓し、人の拵へたと思はるゝ。工學士になつたら一  
つ五高の玄關を作り替へて「通行し得べき玄關」に變  
更して貰ひたい。(鳥)

○人生の行路——北寮二室

氣のきいた積りの作者の心が、氣のきかぬものと  
僕は思つた。(雅)

何だか自分達と馳け離れた解釋のやうだ。(どん)  
スフィックスの謎の次に位は据り相だ。難解の熟語  
集は近來あまり喜ばれぬとか。作り物は作り物らし  
く文句であまり脅しつけぬ方が穩かだと思ふ。

(三郎)

勸善懲惡の意味にでもなるのでもなるのですかい。

(高)

○鯉と戀——北寮三室

鯉の生きたたのを用ふる程の作でもなかつた。(雅)

「あら本當の鯉よ。」と逃げ出した女學生が居た。紀  
念祭の餘興に實際主義を振りまはされちや——「剛毅  
朴訥」が泣き出さうよ。(三郎)

毒惡な瀑布だと思ふ。題意を捕捉するのに苦しませ  
れた。(高)

そげん惡口するもんぢやなかア。(と)

○斬魔劍——北寮四室

一種のこけたどし見たいなもの、と思はせる丈けが  
眞打だ。(三郎)

○雪隱哲學研究所——北寮五室

便所を作つたところは室同人の雪隱文學に力むこと  
も仄見れて、學業以外に餘裕綽々たるを感心せずに  
は居られなかつた。穢い作だと評したら月並かも知  
れない。(雅)

特志家が居て寮の雪隱文學一覺表みたやうなを作  
つて貼りつけてあつたら奈何だ。(どん)

そしたら早速發賣禁止だらうよ。(三郎)

だが噴火口内の黄色いものだけは止して貰ひたかつ  
た。寫實も度を過ぐすと下劣になる。(高)

こんなものは始めて見た。余り高潔な人格を備へた  
人はこんなものは作らぬ。然し吾人の一昨年入寮し  
た時の寮の便所は丸で女郎屋の下落したやうなもの  
であつた。(鳥)

○貸間あり——北寮六室

平凡より上に出ることは出来なかつた。(雅)

「切」であつたので拜見の榮を得なかつた。よつて」  
感想無之。(三郎)

矢張り例の化物屋敷さ、止せば良いのに……。 (高)  
こんなものなら寧ろ作らん方が遙に良い。(鳥)

○ボート——北寮七室(第三等)

佳作だ。短艇と五高生とが實物としか思はれない程  
の適切な光線を取つた所に技倆はある。背景の旭日  
は坊ちやまの惡戯のやうであるけれど、色眼鏡で見  
ると何か希望の光を囁くかの如くにも感ぜられた。

(雅)

五高生が實物のやうに見えたのはほんとだ。(どん  
異議なし、賛成。(三郎)

だが三等はちと安過ぎた様に思ふ。(高)

三等に入つたから好い筈だ。三等は安すぎたと云ふ  
のは賞めすぎる。沙漠館よりか悪い。矢つぱり三等  
だ。(鳥)

○火の魂はドアにあり——北寮八室

あまり暗くて困つてしまつた。やつと戸の開閉と共  
に上下する火の魂を見た時嬉しいうで氣持が悪  
かつた。一体これを作つた室は仲々人が悪いなと恨

めしかつた。(雅)  
いゝ思ひつきだ 恐らく幽霊組の一等だらう。

(どん)

何が何やら薩張り判らなかつた事丈を安價に告白し  
て置く。(三郎)

蓮の葉の臭がまだ鼻にくつゝいて居る。(高)

惡息は甚だ衛生上よくない。殊に貴婦人などには氣  
の毒だ。(鳥)

○龍南瀧——北寮九室

水は可怪しいが技なりの柿の實がいゝ。齒かたのつ  
いたのは柿吊レースの稽古にでも使はれたのか。

(雅)

雅君はごうも物質主義に傾いて困る。と申す吾輩も  
白狀すれば破壊されたる柿の實が這入りさまに直ぐ  
眼界に入つたんだ。(三郎)

人が居なかつたら二つ三つ失敬する心算だつたのだ  
らう。(高)

大方澁柿ならん。喰ひかけしてあるのは却つていけ  
ぬ。(鳥)

見ゐるよりやつぱり食つた方が甘いからな。(どん)

◎櫻狩——北寮十室

すばらしいあか／＼とした作だ。今年の様なメラン  
コリーに傾いた作品の勝つた時に是を見出し得たの  
は萬陰叢中雅一點といふ掛合にて氣分といふ點に於  
ては一頭地を抜いてゐる。馬はいゝと誰かと言つて  
ゐた。「咲いた櫻に何故駒繫ぐ、駒が勇めば花が散  
る。」デカンシヨ節を脚本としてみた作であるから  
馬に主の姿なきは大によい。(雅)

櫻に短冊をつるして置いた所が風流なのだらう。春  
めいた心持になる方が觀者も骨が折れない。(どん)  
申分には駒の頭が比載的小さかつたがケチを附けて  
居ては果てしがない。君子は過を見て其の仁を知る  
矣。數日前からの力瘤が想像されて大いに頼もしい。

(三郎)

此の位骨を折つて呉れると見る方でも見物甲斐があ  
ると云ふものだ、どうして賞に入らなかつたかしら

(高)

大分金が要つたらう。(鳥)

○荒城の月——北寮十一室

少くとも三等には推したかつた。この作は新しい。

藝術の香りに充ち充ちてゐる。廢墟といふ感じが泌  
々起る。弦月とあかい窓は堪らなくいゝけれど、樹  
の葉が變だ。(雅)

廢跡といふ字からしてなつかしい氣持する、外國の  
寫真版でも見てゐるつもりでゐた。(どん)

「ふくろふの啼くや古城のたはろ月」。物靜かな荒城  
の月に對して、ゆくりなくも、廻る盃に影のさした  
高樓の花のうたげを泌々と想ひ出して居た。(三郎)  
其んなに賞める程のものでもあるまい、唯薄暗いの  
でごまかしは利いて居たが。(高)

大分評判が佳いけれど悲しい哉僕はどんなものか思  
出せない。(鳥)

○二重山怪僧立祈念——北寮十二室

二重山の山門はよい。外にさう感心する所もなかつ  
た。(雅)

頭の鈍い者にはちと判り難い。(どん)

所謂怪僧は室長さんがどうかするものし兼ねまい  
でもない様な代物だつたと記憶する。(三郎)

こう云ふ風のもの僕らは好かぬ。(鳥)

○死の神の部屋——北寮十三室

この室の歴史と相俟つて面白い。何となく何かを暗示してゐるやうであつた。淋しい提灯もいゝし、室を半分しか使はなかつたのもいゝが、單に作としては上乘でない。(雅)

單に墓石を累々とした方よかつたかも知れない。餘裕があつたので氣持がよかつた誰かは蚊帳の内に何かしてゐる室員をも作り物だと思つてぞつとしたさうだ。(とん)

「室の歴史」なごゝ弱音を吐く處が抑々人情の美点かも知れない。(三郎)

メランコリーには閉口だ。(鳥)

### ○鳴立澤——北寮十四室(第一等)

覺ムレバ一片眞如ノ月——印象のつよい文字である月が堪らなくいゝ。月の水硝子戸に映つた所は用意周到である。西行もわざとらしくなく善い出来た。作意の優れた上に、光線に力を用ひたのは結構であつた。室長は超俗論者でもあるまいが心憎い人である。(雅)

西行の姿が暗いので見えない、「覺むれば」もちと明るくしてもいゝだらうだが精巧を極めたものだ。(と)

女房と疊とは新しいのがいゝ相だが、是は反對で長く見てれば見る程いゝ。月の光の映つた工合は四邊の雰圍氣に對照して一しは引立つて見えた。一等とは誰が見ても異論のない所であらう。(三郎)

唯一枚の水硝子戸でも使ひ道によつては斯う生きて來る、何處やらの室の様に足も踏込めない程も水を流したのに比すれば格段の相違だ。(高)

どんな鈍い男の頭にでも「一片眞如の月」と云ふ字は早速映するに違ひない。幽鬱な材を捕へて清涼明快の感を與へたのは感心、始めから一等と思つて居た。

(鳥)

や、買収されたな。(〇)

### ○乾坤の精華——北十五室

佳作である。竹の皮で作つた鷺は、鋭い眼と嘴と共に甚だ佳である。殊に景をそふる木が皆有効に用ひられてゐる。光線に、もう少し努力して貰いたかつた。(雅)

此度、あらゆる動物の中で最もよく出来たのはこの鷺だらう。「一富士二鷹三なすび」といふがね。(と)竹の皮作品會に押出したなら差詰入賞物だらう。眼



光最も爛々として「希望の光」たるに些のひけをも見せてないのが嬉しい。(三郎)

富士山に鷺と云ふ配合は御珍らしい。(高)

○憂愁——北寮十六室

紺の蛇の目に眼を惹いたが拙い作だと思つたばかりだ。(雅)

あとに残れるもの、曰く無<sup>し</sup>矣。(三郎)

何の爲めの大入道か殆意味が分からぬ。(高)

題が第一氣に入らぬ。(鳥)

○そばや——北寮十七室

同人は東京庵の親類らしい。これも亦遺憾乍らよくなかつた。(雅)

細軒簾か何かで例の「たでんかんざけ」を脚本にしたらこんなものになるとするどでかんしよがちと貧弱になる。(どん)

看枝計りで實物を提供せないとすると、書に描きし揚貴妃と一般、北山時雨でしよつちゆう正午を報じてゐる公達にはうそだ。(三郎)

○べ切——北寮十八室

何だか悠々と室の真中で生花などいぢくつて居た様

子だつたが、閑日月ある諸君は定めし將來蓋世の英雄となる事であらう。(三郎)

○二見浦——北寮十九室

窓から景色を覗かせたのはいゝが、神秘的な色に間が抜けたやうに感じられて飽氣なかつた。(雅)

うんともすんとも標榜せないで、だしぬけに見せ付けられたのには少々空恐ろしい氣もした。(三郎)

○かし家——北寮二十室

室内斜に大蜘蛛の巣を張つたはいゝけれど、あまり誇張されてゐはしまいかと思つた。そこが作り物だといへばそれまでである。ガランとした張合のない淋しい所にかし家がよくあらはれてはゐた。(雅)

作者の主張せんとする意義を忖度するに苦しむ。

(三郎)

つまり荒れ果てた貸家に蜘蛛が巣を張つたと云ふだけの事さ。(高)

可いな！誇張されてる所がよい。しかし貸家捜しに行つてこんな奴が出顯したら命懸の危険だ。(鳥)

○百万年後の動物園——北寮、雜誌部委員室

自分の作物を自分で評しては變だが主觀に陥りさへしなければ構ひはしない。紀念日の朝一二時間の作としてはザッシブー博士の御手の内衷心感服の至りだ。百万年以前より計へた今日の動物園である。人類館と書いてあつた。見る人、見らるゝ人が互に動物視されてる事に氣付かぬ頓馬もあつたが、記者は尙動物としてこの人々を傍觀し乍ら、此の動物の頭の悪いのには涙が出た。作は酷い皮肉を語つてゐる。この點では恐らく全作り物中の第一であらう。評は主觀でない。(雅)

要するに凡てが主觀でありたい徹底しない客觀よりは四さが優でないかといふ主張だつてね。(どん)  
何といつても一朝作りの物だからね。(三郎)

頭の鈍い奴には分りつこは無いよ。(高)

あんまりよすぎた。遂に俗人には解らぬ。やつぱり善過ぎん方がいゝ。(鳥)

### ○猫の聲——北寮二十室

肝腎かなめな猫が居眠りしてゐるので折角手を拍つても反響的な鳴聲が起るまい。尤も僕がこの作物を見たのは秋の日のあかるい午後のことだつたから、

深夜に反響するといふ猫がまだ仕事に手をつけるに餘りある暇を持つてゐたのでうつかり隋眠を貪つてゐたのらしい。(雅)

「松の上の猫の眞に逼つて居るのは驚くばかり」と雜誌部への投書があつたが、あれが本物の猫でなかつたなら夫れこそ化猫でどうもあつたらう。(三郎)  
石橋から掌をつき出したのが氣に入つた猫の鳴聲正に聞きたり。(どん)

猫を鳴かせる様に工夫をすれば良いのに。(高)

### ○阿蘇の山——北寮二十二室

實際の煙を出したのは鳥渡思ひ付がいゝ。併し一体にしまりのない作だ。殊にばせをの葉は無意味である。(雅)

場合が場合で致方もなからうが線香噴火山では阿蘇も浮ばれまい。記者は當日幸ひ風を引いて居たので乙な煙の香に咽ふ光榮を免れた。五高の生徒さんは思付き。(三郎)

朝早く行つて見たら室員が、一生懸命で煙草を吹かして居たのを見た。(高)

先日旭屋の満州の背景にベナナの木があつた。(と)

○頓品館——新寮一室

あらゆる此の種の作り物の場合に見慣れてゐるから面白とは思はなかつたけれど、觀衆は喜んでゐた。作は新しくなくては駄目なやうである。(雅)

よく集めたとの評判だ、陽貴妃の化粧品に大塚先生が噴きだしたさうだ。(どん)

湯之盤の銘に曰く、苟に日に新にせば日に日に新にして又日に新なり、と。雷鳥ではないが、陳腐なものには竟に葬らるべき運命に在いてある。空中飛行機は先達百二十哩のレコードを創作した相だ。(三郎)

○飛行機——新寮二室

空には幾つも飛行機が飛んだ。大きな飛行機は念が入つたらしい。一体には作として半煮ゆの作である

(雅)

出来栄にも無論悪くはないが、單に勞力の點から論及したならば大分價值のあるものであらう。(三郎)

(高)

○昇る旭——新寮三室

何の感も起らなかつた。這麼廣い處はもつと何か雄大なものでも作つて欲しかつた。(雅)

潑刺たる青春をた粗末な氣分劇に仕組んだ所がせめてもの功名だ。五の仕事で十丈の評價を見物に要求する様な傾向は此頃よく西洋あたりで流行る相な。

(三郎)

泥棒よりも太い考が流行るのだね。(高)

やれやれ、うんざりした。(どん)

○沙漠館——新寮四室(第二等)

幽思に沈める廣漠たるサハラ大沙漠——すべてが藝術的によく作られたのは、此の當選の所以である。

オアシスよりオアシスへと行くカラバンを強く偲ばせた。パノラマ式應用は甚だ賢い。殊に熱帶樹を、樅松の小枝と背景の畫とであらはしたところは入念なものだ。Pyramidと Sphinx との配置にも難はない。(雅)

壯大だ、人生の行路とかモーターボートとか云つた風に直接に或る物を表示しやうと試みるより一步進んでゐる、最後に此室まで來て蘇生つたやうに思つたのは憂愁から快活に、「眞如の月」から「オアシス」

に來たのであらう、僕はこれが第一等であつてもよいと思つた。(と)

僕も尻尾に乗つて、「見事でムいました。」と世辭を振まいて置かう。(三郎)

明るい感じの良い作だ、光線の入りの良い廣い室が巧みに利用されて居た。南寮北寮の薄暗い室の人間が化物を作る隙に新寮の明るい室の人間は廣漠たるサワラ砂漠を作る、當局者は此現象にどういふ解釋を與へたかしらん。(高)

そんな問題を解決することになると入費がよつて文部省が嫌ふ。北寮と南寮に居る人の半分は禍なる哉噫神よ恵を降し給へ。全体五高を造つた大工は余ほど馬鹿だ。赦す可らざる馬鹿だ。八百の生徒の氣分とからだを打壞するから非常な罪人だ。(鳥)

附

### 白雨會繪畫展覽會 (於南寮圖書室)

町寧に貼つた切手集が目についた。國周の綿繪(專崎ヒロム出品)は懐しかった。臺灣の首切刀は生蕃を偲ばせ、一文錢や今戸燒の玩具等は嬉しく思

はせた。繪畫では梅(寺田香邨)は唯一つ日本畫でさほど傑作ではなかつたけれど珍しかった。多忙のため、只一瞥しか與へられなかつたので、頭に殘つたものも少いが、別れし後(野村)、書齋より(田代)、露路(大森)、倉(大森)、六歌仙(野村)、收穫の後(しろ)などは僕の嗜好と一致したやうだ。武夫原(牧川)は未成品と斷つてあつた。達者な筆ではあるやうだが少し誇張された作ではないかしらと思つた。大森君の描いた眞畫とても名つくべき無題の作は、あか／＼としたい、作だと思つた。ロダンの彫刻を寫眞畫にして並べたのには、趣味の眼を向けずには居られなかつた。第一回の展覽會であつたから、縱令成功とまでは行かなかつたとしても、白雨會の前途は光明に充ち充ちてゐる。切に同會の發展を望む。(雅)

### 龍南會大正元年度決算計算書

收入ノ部

前年度繰越

名譽會員寄附

二九七九三〇  
五八八一五〇

通常會員會費

新入會員入會金

預金利子

不用物品賣却代

合 計

支出ノ部

演 說 部

雜 誌 部

擊 劍 部

柔 道 部

弓 術 部

野 球 部

庭 球 部

端 艇 部

水 泳 部

無 所 屬

艇庫移築費へ繰入

翌年度へ繰越

合 計

一、五〇八九〇〇

三一一〇〇〇

八六八〇

二五〇〇〇

二、七三九六六〇

五一六三〇

三八一七二〇

一七四四九〇

一六二〇〇〇

一〇五一〇〇

一八五七八〇

二〇一三五〇

三二六三一〇

九七三〇〇

二七五九九〇

四八三三〇〇

二九四六九〇

二、七三九六六〇

## 龍南時報

### ○由比先生を送る

明治四十年二月二日教授兼生徒監として本校に來られしより以來先生の本校に盡されし功績の大なるは云ふまでも無し殊に生徒監として寮のために盡瘁せられしに到つては寮の今日あるを知るものは一樣に感謝の念を捧ぐるを惜まざるべし。校外に於ても各地方に講演者として招かれ國民的知識の啓發に功あり今三高に聘せられて本校を去らる。惜別の情に堪へず伏して先生の健康を祈る。

### ○七月以降職員消息

七月二十五日。教授山川信次郎氏休職を命ぜらる。

九月 十六日。佐伯好市氏新に教授に任せらる。

十月 十八日。教授由比質氏三高に轉任さる。

十月二十三日。松浦校長辭任さる。

### ○發火演習

十一月十一日出發福岡方面へ旅行と決定す

## 村尾五十彦君を哭す。

秋風颯々として愁人の想を傷ましむ。突如として吾人の耳朶を打つものあり。曰く、二部三年甲村尾五十彦君九月二十有七日其の郷里佐世保に於て長逝さる、と。噫村尾君真に逝きしか。吾人云ふ所を知らざるなり。

曩に君の二豎を以て故山に歸養するや知ると知らざるどなく皆嘗つて溫雅なる君が相貌を再び龍南の疊舎に見ゆるの機會あらん事を期待したりき。惜むべし天君に齡を籍さず金風一陣君が俤は復尋ねべくもあらずなりぬ。悲しからずや。

君家に老いたる父母あり、懷しき弟妹あり。資性又蓋世の概なかりしとせんも而も内玉の如き溫情あり學窓のつれなくいかに故郷の空偲び給ひけん。今や乃ち亡し。悼ましい哉。

吁死は悼まし、若き人の死は更に悼まし。世路無常運命の數洵に感知すべからずと雖も青春有爲の材を抱いて空しく白玉樓中の人となり給ふ。悲しからずとせんや。以て弔辭に代ふ。

十二月發行の本誌を前校長松浦寅三郎先生に捧げむとす。諸先生及び生徒諸君の投稿を希望す。

大正二年十月

龍南會雜誌部

### 編輯の後に

○投稿の殆ど凡ては創作物なので制限のある文苑欄に載せつくせませんでした。水泳演説部報も次號に残されなければならないようになりました。御諒察を願つて置きます。

○聯絡の秋更けて筑紫の野を蹂躪する時も近まりました。曠野に於ける活躍も快心の一であります。われわれ非戦闘員は少々羨みます。お土産話は餘さず拾つて歸ります。

○前號は期日切迫の爲め委員不馴れのために非常に誤植が多うございました。本號も間て校正が抜けたりして誤植皆無とは申されません。訂正は略しますが御断りだけ致して置きます。

(山間僻地、寒冷堪へ難き編輯室にて)